

夢 童

菅波 茂

アフガニスタンの首都・カブールで、AMD Aの同国支部長であるラヒム医師が主力となった「日本—アフガニスタン友好病院」構想が検討されている。目的は三つある。

一つはAMD Aが近い将来、アフガニスタン復興支援に参加する時の拠点。二つ目は同国で多発する地震などの災害被災者に対する救援活動時の拠点。最後は「親日」の推進である。いづれにしても、アフガニスタンは1989年以降、内戦による乳幼児死亡率が1000人に165人、平均寿命が46歳と劣悪な医療環境におかれている。医療機関は多ければ多いほうが良い。

ラヒム医師は、AMD Aと約6年間にわたって実施されたパキスタン・バルチスタン州都クエッタでの、アフガニスタン難民支援プロジェクトの良きパートナーだった。あごひげが特徴の素朴なパシトゥーン人である。彼は現地NGO・A H D Sのコーディネーターでもある。カンダハルとカブールに事務所を設け、内戦による負傷者の医療に尽力している。

09年2月、インドのマニパールで開催されたAMD A南西アジア地区支部長会議の時に、彼からアフガン政府から委託されたカブールでのヘルスセンタープロジェクトの相談があった。私はバングラデシュ支部長のナイーム医師と一緒に相談に乗った。ナイーム医師のラヒム医師への助言は、

## 日本—アフガン友好病院構想

「まず自分の生活基盤を固めて社会貢献するべきだ」だった。結論はプライベートセクターとして「日本—アフガニスタン友好病院構想」だった。私とナイーム医師は個人的に積極的な支援を決めた。

ナイーム医師は、バングラデシュの首都・ダッカの中心にプライベートセクターとして百床を有するトップクラスの総合病院の院長である。その名は「日本—バングラデシユ友好病院」である。

彼は東大の外科系大学院を修了する前、私に相談に来た。「自分と2人の仲間は、大学院を卒業して母国に帰っても、日本の医学博士号ではポシシヨンがない。開業するか、欧米で再びマスターを取得し直して母国でポシシヨンを得る選択しかない」と。ダッカの奇跡

と例えられた団結力で、夜遅くまで働いて私が貸したお金を8年間で返済した。私がお金を貸す案件は三つあった。一つはAMD Aのバングラデシユにおける災害被災者救援活動の拠点。二つ目は日本の医学博士号取得者の優先雇用。最後は「親日」の推進だった。ナイーム医師はこれらの約束を守っている。

「援助を受ける側にもプライドがある」とは、AMD Aの人道援助の三原則の一つである。「お金をあげる」と「お金を貸してあげる」とは雲泥の差がある。「お金を貸してあげる」とは「あなたにはお金を返す能力がある」との意味がある。ただし、友としてお金を返してもらう期限を延ばすことはできる。ラヒム医師は08年11月、パキスタンとアフガニスタンの

国境付近で発生した地震被災者救援活動に医療チームを迅速に派遣してくれた。AMD A本部が送金した金額より低い金額で救援活動が終了した時、本部にメールが入った。「残ったお金をどうしたよいか。指本を求めると。古き良きパシトゥーン人の道徳を身に付けたラヒム医師を再認識した瞬間だった。同時にうれしかったのは、ナイーム医師が支援する側に立ったことである。

「困った時はお互い様」の相互扶助精神が血縁共同体社会を超える時、「開かれた相互扶助」に昇華する。これこそ、世界の8割を占める血縁共同体社会が世界平和へと向かう国民（市民）参加型相互扶助人道支援外交の要諦である。

(AMD Aグループ代表